

日本は島国である。本島と呼ばれる北海道、本州、四国、九州、沖縄本島の五島を中心に、国土地理院の調査によると一四、一二五の島がある。このうち人が住みかつ橋などで本島とつながっていない島は約三二〇島に及ぶ。著者は現役生活引退後の二〇一二年から約一年半をかけて、東京都小笠原村の硫黄島と南鳥島を除く三二一島（訪問時に無人島になっていた島も含む）を巡り、島の人々の暮らしと生業を調査し、記録に留めてきた。

島は海で隔絶していたから、かつて多くの島では、自然に依拠する自給自足の生活が営まれ、独自の文化を育んできた。日本列島は南北に細長く、亜寒帯から亜熱帯までを含むことから多様な生物が棲み、それぞれの水土に合わせた暮らしが成立していた。島の周りは海に囲まれているからどの島でも基本的に漁業が営まれ、そして平地や水が乏しい島では、「耕して天に至る」と形容されるように山の上まで段々畑を造成し、麦や芋が作られた。貧しかったが豊かな暮らしをしていたのである。

しかし、高度経済成長を境に島でも貨幣経済化が進むと、自給自足の生活は放棄を迫られる。農作物は換金作物へと転換し、漁業は重要な現金収入源となった。そして島から都市へと人口が流出し、島の人口は減少、高齢化が進んだ。この間、無人島になった島も多い。島社会は日本社会の少子高齢化を先取りしたのである。

しかし島は、国益の確保、多様な文化や自然の維持、水産海洋資源の利用などのためにかけがえのない存在であり、無人島化を阻止し、島を再生させることはきわめて重要な課題になっている。若い人々の島への移住や新しい産業育成も芽吹き始めている。著者が旅をした二十一世紀前半は高度経済成長以前の島の暮らしを経験した最後の世代がまだ島で活躍していた時期であり、一方で新しい人材に入れ替わりつつあった時代ともいえる。本シリーズは二十一世紀前半のこうした時勢における日本の島々の暮らしの記録である。

本叢書の特色

- ・ 海洋環境と水産業のコンサルタントとして、農水省や各地の漁協等への助言、指導に長年たずさわってきた著者が、民間人の住む日本のすべての有人離島をめぐり歩いた紀行文集。
- ・ 計三二一島のすべてについて島ごとに書きついだ紀行文を全十七巻に集成。著者自身が撮影した写真も多数収録。
- ・ 荒波にさらされる島々の産業、文化、人々の暮らしのありさまを活写する珠玉の文章群。
- ・ 日本の離島について関心のある方々から海洋環境・水産業関係者、島に生きる方々、島に生まれ育った方々まで必読の書。

【造本・頁数・定価等】 四六判並製8ポ一段組／各巻平均三五〇頁／定価三〇〇〇～三五〇〇円（＋税）／毎月一冊刊行 二〇二七年五月に全巻完結予定【【乾政秀（いぬいまさひで）】 一九四八年、神奈川県に生まれる。県立横浜翠嵐高校、東京水産大学（現東京海洋大学）に学び、同大学大学院修士課程修了。株式会社水士舎代表取締役、最高顧問を経て、現在、同社相談役。主な著書に『島の暮らしを支える漁業と生業』（青娥書房、二〇二五年）など】